

◆ 今週のコメント

- 腸管出血性大腸菌感染症の報告が2例(共に30歳代女性)あります。血清型別・毒素型は、O157(VT1VT2)が1例、不明が1例です。不明の1例は、溶血性尿毒症症候群(HUS)を発症しており、HUS発症例は本年2例目の報告になります。推定感染経路は、経口感染が1例、不明が1例です。
- 風しん(検査診断例)の報告が2例(男性 20歳代, 女性 10歳代)あります。ワクチン接種歴は共に不明です。本年の累積報告数は22例と非常に多くなっており、性別は、男性14例、女性8例、年齢階級別は、0歳代1例、10歳代2例、20歳代7例、30歳代3例、40歳代6例、50歳以上3例になっています。
- 手足口病の定点当たり報告数は0.32(13例)で、2週連続で増加しています。年齢階級別では、すべて5歳以下からの報告で、1歳が7例(53.8%)と最も多くなっています。

○風しんの年間累積報告数の*推移

	H.20	H.21	H.22	H.23	H.24
男	0	1	0	0	14
女	1	0	0	0	8
合計	1	1	0	0	22

*定点把握対象疾患から全数把握対象疾患に変更後の推移

◆ 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

RSウイルス感染症の定点当たり報告数は0.93(38例)で、第34週(8月20日～8月26日)以降、4週連続で増加しており、過去5年平均値の10倍以上となっています。詳細をトピックスに掲載しています。

◆ 発生状況

全数把握の感染

- 三類: 腸管出血性大腸菌感染症 2例【1月以降の累積報告数 19例】
- 五類: アメーバ赤痢(腸管及び腸管外アメーバ症) 1例【1月以降の累積報告数 10例】
- 五類: 風しん(検査診断例) 2例【1月以降の累積報告数 22例】

定点把握の主な感染

(市内定点数 インフルエンザ定点68, 小児科定点41, 眼科定点10, 基幹定点1)

定点	感染症名	定点当たり報告数	報告数
インフルエンザ	インフルエンザ	0.00	0
小児科 (降順5位まで)	① 感染性胃腸炎	2.49	102
	② RSウイルス感染症	0.93	38
	③ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	0.73	30
	④ 突発性発しん	0.49	20
	⑤ 水痘	0.34	14
	⑤ ヘルパンギーナ	0.34	14
眼科	流行性角結膜炎	0.80	8

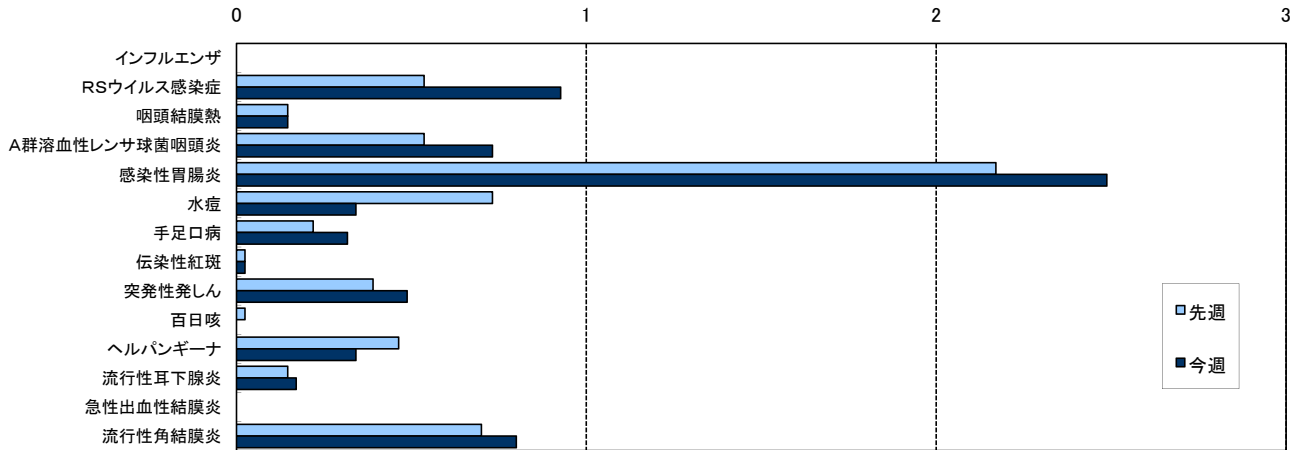
【次ページ以降の主な内容】

発生状況の概況グラフ / 今週のトピックス: <RSウイルス感染症>

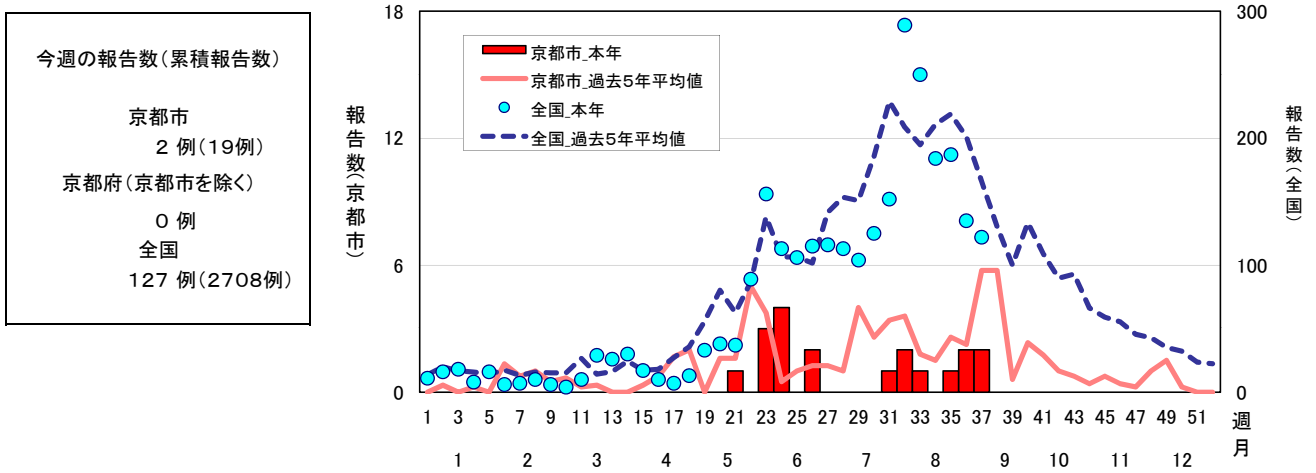
(注) 京都市のデータは、平成24年9月20日現在の報告数で、全国の還元データと若干異なる場合があります。また、本情報での患者数は、届出医療機関所在地での集計で、患者の住所を示すものではありません。

◆ 発生状況の概況グラフ

1 今週(第37週)と先週(第36週)の定点当たり報告数の比較

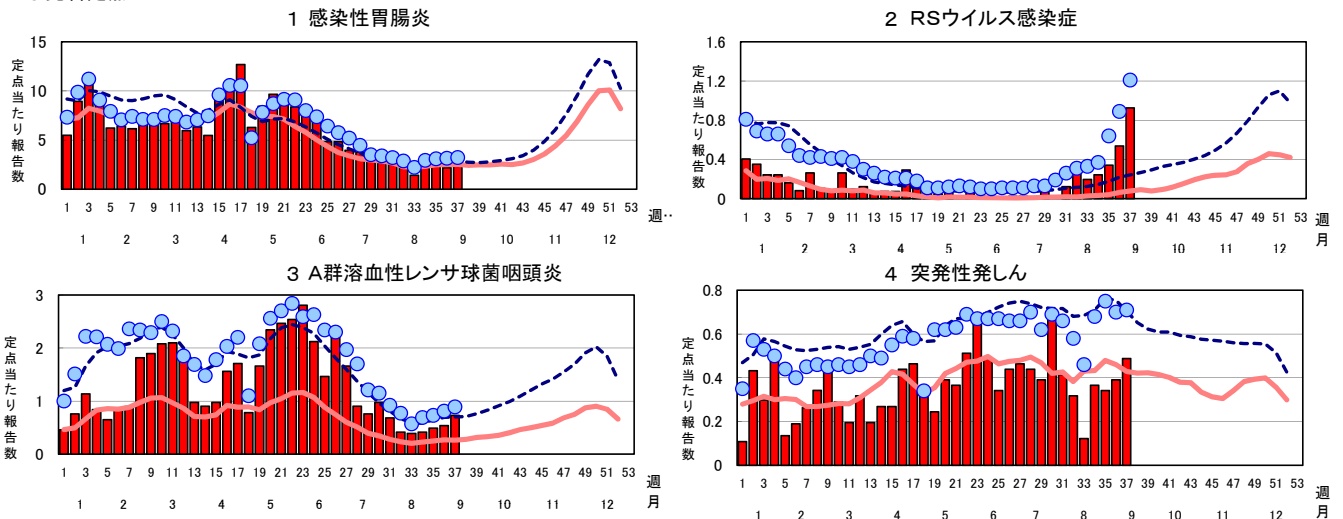


2 腸管出血性大腸菌感染症の推移

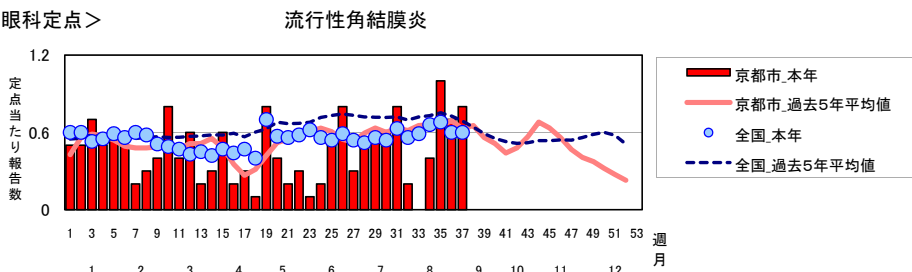


3 主な感染症の定点当たり報告数の推移

<小児科定点>



<眼科定点>



第37週(9月10日～9月16日)トピックス: <RSウイルス感染症>

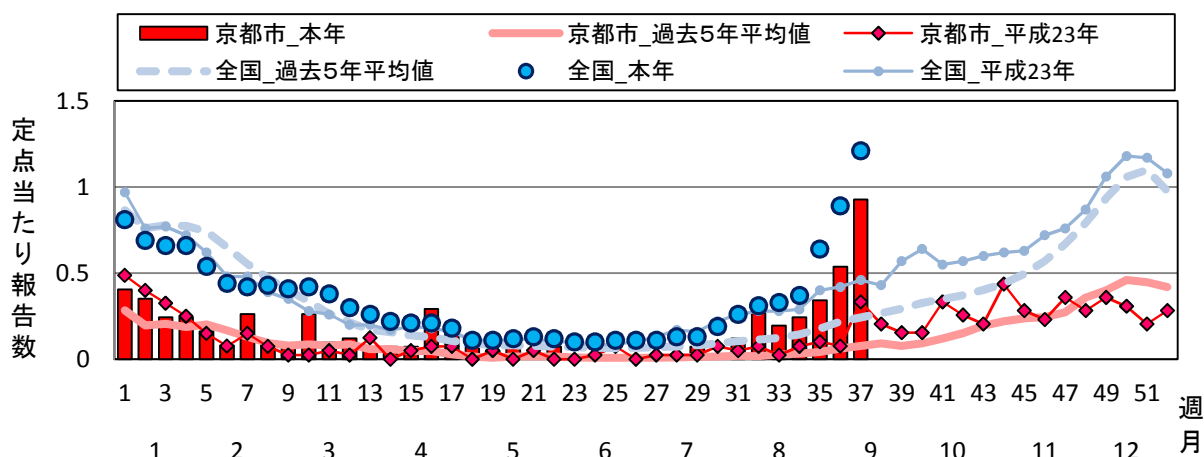
RSウイルス感染症の定点当たり報告数は0.93(38例)で、第34週(8月20日～8月26日)以降、4週連続で増加しており、過去5年平均値の10倍以上となっています。「感染症法」において定点把握対象に指定された平成16年以降の同時期と比較して、最も多い報告数です。全国でも3週連続で急増しています。今後の動向にご注意ください。

近畿6府県でも、すべての府県で定点当たり報告数が2週以上連続で増加しています。

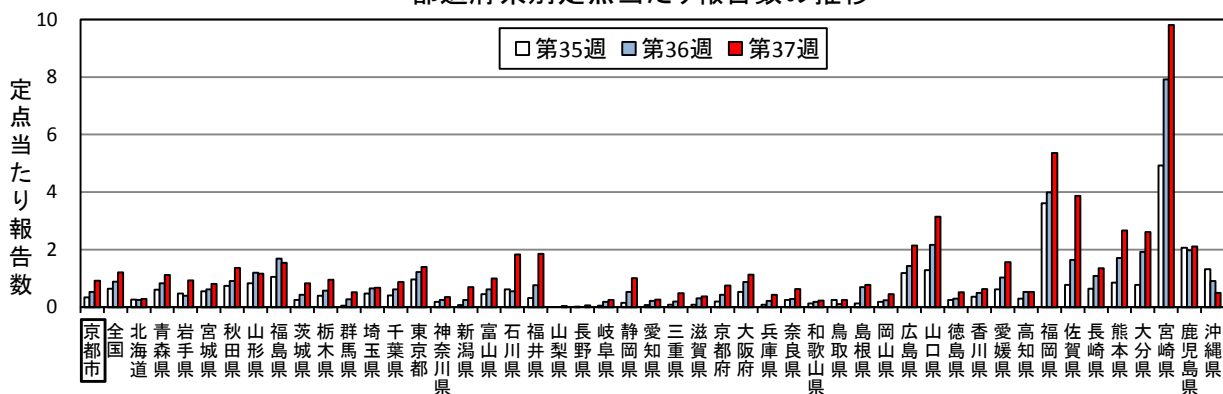
年齢階級別では、1歳が19例(50.0%)と最も多く、次いで6箇月～11箇月 8例(21.1%)となっており、0～1歳で84.2%を占めています。

本疾患は、乳幼児で重症化しやすく、乳幼児における肺炎の約50%、細気管支炎の50～90%を占めています。特に5箇月以下では重篤な症状を呈し、入院による治療が必要となる場合があります。

京都市衛生環境研究所において病原体定点からの検体を検査した結果、RSウイルスは、8月に4件、9月に1件分離されています。(平成24年9月20日現在)



都道府県別定点当たり報告数の推移



年齢階級別定点当たり報告数の推移

